

経験を「経路」として理解する —子どもの成長と街歩きを軸とする二人称研究の構想— Understanding Experience as a 'Route'

- A Framework for Second-Person Research Focusing on Children's Growth and Citywalk -

北 雄介[†]

Yusuke Kita

[†]長岡造形大学

Nagaoka Institute of Design

ykita@nagaoka-id.ac.jp

概要

あらゆる経験は「経路」の概念で理解でき、我々の生は多数の経路の織りなすメッシュワークとして捉えられる。経験の全体性を経路として読み解くためのケーススタディとして、筆者の長男を対象とした二人称研究を構想する。研究方法は、長男の日常的な成長や変化を簡単に記録する「Kuya Diary」と、街歩きにおける発話や行動を多面的に記録する「Kuya Stroll」から成る。本稿では2025年6月末時点での研究の進捗を報じ、その方法について検証する。

キーワード：研究方法論、空間認知、発達

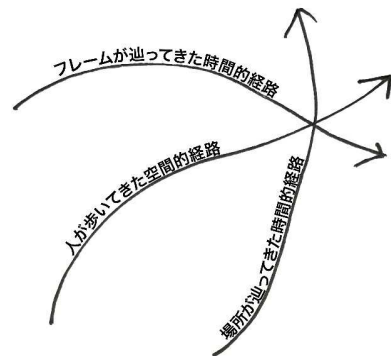


図1 3つの経路の交わり

1. はじめに

1.1. 経験と経路

筆者はこれまで、我々が街を歩きながらさまざまなことを感じ、考える経験を「経路 (route)」の概念によって解読してきた (北, 2023)。経路とは原 (1994) の提示する、方向性をもつ線を意味する概念であり、一本の矢印によって図示される。街を歩けばその道すじ、すなわち空間的な経路に沿って、さまざまな情景を連続的に体験する。その移り変わりの中で、「賑やかになったな」「古い家が多いな」などを感じる。つまりある場所で感じたことや、そこで発せられた言葉を、その場所だけではなく経路というシークエンスの上で理解する。

さらに街歩きにおける認知は、その人の生まれ育った街、培ってきた記憶や価値観などのフレーム (frame) が基盤となっている。また、ある人が何かを感じた都市という場所も、数百年もの時間の積み重ねの上に成り立っている。このように考えると、街歩きにおける認知という現象は、その人が歩いてきた空間的経路、その人のフレームが辿ってきた時間的経路、場所が辿ってきた時間的経路という3本の経路の交点において生起していると考えることができる (図1)。

経路という概念装置は街歩きに限らず、経験一般を理解するのに有効ではないだろうか。自動車や飛行機での移動も、あるいは会話や思考といった空間的移動

を伴わない経験でさえも、連続的に継起する。あらゆる経験は経路的であり、ある刹那の現象も、経路というコンテキストの俎上で解釈されるべきである。そして我々の生は、歩行、運転、会話、食事、睡眠等のさまざまな種類の経験が、経路上に数珠つなぎになったものである。この一連の経験と、場所の経路や他者の経路などが複雑に絡まり合いながら、我々の生は展開する。インゴルド (2014) は言語や音楽、旅などのさまざまな現象を「ライン」として捉え、世界を多数の点の関係性から成るネットワーク—そこではラインの軌跡は捨象される—に代わり、メッシュワーク (meshwork) —一本一本のラインの軌跡が織りなす網細工—として捉える見方を提示する。人の生は、各々に複雑な履歴を持つ多数の経路による、メッシュワークなのである。

1.2. 本研究および本稿の目的

本研究では、我々の経験を経路という概念で理解し、分析するための方法論の構築を目指す。そのための具体的なケースとして、筆者自身の長男である北空矢 (現在2歳) を対象とし、彼の経験にかかわる多数の経路を、高い解像度で分析する。長男は筆者が日常的に間近で観察できる対象である上に、幼少期はさまざまな新しい体験をし、フレーム変容の度合いも大きい時期である。今後10年程度のスパンで、長男の経験を追い続けた。本稿は研究のスタート段階のものであり、研究方法を構想し、検証することを目的とする。

2. 筆者の長男を対象とした二人称研究

2.1. 研究方法の概要とその狙い

最初に研究方法の大枠を述べると、「Kuya Diary」と「Kuya Stroll」という2つの方法により、データを取得する。Kuya Diaryでは、長男の成長や日常行動の変化などに関して筆者や妻が気がついたことを、Google Formを用いて自由記述形式で簡単に記録する。Kuya Strollでは散歩や旅行などの際の長男の街歩き体験を、後述するWalkieLoggerというシステムを用いて、映像、位置情報、発話内容といった多様なモードで記録する。

経験の全体像を真の意味で解き明かすには、その人の生の全てをくまなく記録するべきだろう。しかしそのようなデータの分析にはまた、人の生を捧げるほどの労力を要する。そこで、目の前で展開している長男の経験を、分析しながら言語化するのがKuya Diaryである。一方そのデータだけでは、彼の経験の肌合いにまで迫ることは難しい。そこで街を歩く際にはなるべくリッチなデータを取得し、質的に読み解いていく。長男のフレームの長期的変容が街歩きにどう反映されるのかといった、立体的な分析が可能となる。

2.2. 二人称研究

本研究では、長男をフィールドの外から観察するのではなく、生活の中で筆者自身が彼とかかわりあいながらデータを取得する。必然的に、長男の経験に対して筆者が介入する。筆者や妻は日常的に、長男と一緒に遊んだり言葉を教えたりして、彼のフレームを変容させるし、散歩をしながらこの道を歩こうと誘導したり、車の接近などの際には彼を抱きかかえたりもする。また記録の仕方や内容にも、恣意性や偶然性が介在する。Kuya DiaryもKuya Strollも、記録は筆者や長男の生活上できるときに行なうだけで、頻度はまちまちである。Kuya Diaryでは、筆者や妻が気づき、面白い、書き残したいと思ったことだけが記録される。

このように、取得されるデータはいわゆる客観性を欠いている。しかし、親という立場でしか取れないデータでもある。子どもの起床から就寝までのサイクルにずっと密着するなど、親でなければ不可能であろう。身体的、感情的な関係性の中で、長男の成長の機微を感じ取れる点も、重要である。また仮に第三者が筆者の取得したデータを見たとしても、十分にそれを解釈することはできないかもしれない。ともに生きる者だからこそ、彼の生きる経路の全体性に接近できる。

レディ (2015) は乳幼児の研究に際し、彼らを一般他

者と見做した実験に基づく三人称的な研究態度に代わり、「あなた (You)」として捉えて情動的にかかわる中で観察をする「二人称的アプローチ」を提唱する。また一人称研究を推し進める諏訪 (2015) も、他者との対話を通じた二人称研究の重要性を指摘している。本研究もこの立場から、筆者と長男との親子としてのかかわりあいの中で進める。経路論に則って言い換えると、筆者の経路と長男の経路との交わりにおいて、長男の経験を研究するのである。

次章以降では、本稿執筆時 (2025年6月末) までの研究進捗状況を報告し、その方法を検証する。

3. Kuya Diary

3.1. データ取得の方法と状況

データの記入フォームは「日付」「観察した事実」「補足」「考察」「当該日の行動概要」から成り、いずれも自由記述で入力する。今後、一つ一つの記録を「出来事」と呼ぶ。記録は長男が1歳4ヶ月となった2024年8月に開始したが、それ以前に遡った出来事も入力した。2025年6月末の時点で、519の記録が得られている。

3.2. 出来事のタグ付け

多量の自由記述データの分析のため、各記録の「観察した事実」「補足」「考察」とを合わせたものに対し、タグ付けを行なう。先行研究などに所与のタグのセットが存在するわけではなく、実際のデータを見ながら探索的に、タグ付けとタグセットの作成を進める。筆者が街歩き実験における自由記述データを分析した際と、同様の方法に則っている (北, 2023, pp.103-110)。

現時点でのタグセットと、各タグの使用数は表1のようになっている。「行為」「感情」「行為や出来事の背景や対象」「トラブル」「考察」に大別され、さらに下の階層へ分類されて個々のタグに至る。もっともタグの一意の分類は難しく、ツリー状の階層構成は便宜的である。たとえば「言語・概念活動」の中の「語感」は、オノマトペなど語感の気に入った言葉を喜んで発する行為を意味しているが、これは「遊び」でもあるだろう。このように、タグのカテゴリー同士は交絡関係にある。

また表1は現時点での暫定的なタグセットであり、今後更新されうる。タグセットは子どもの経路的経験の全体性を、言語により表現するための概念の一覧であり、それ自体が本研究の主要な成果の一つとなる。

3.3. 経験の経路性の記述

一連の出来事を、経路概念に則って読み解くことを

表1 Kuya Diaryの出来事に対するタグのリスト

分類	タグ名	使用数	分類	タグ名	使用数
言語	発語	8	シ	食事	30
	語彙	46		風呂	33
	対話	42		洗面所	4
概念活動	語感	38		就寝	7
	言語理解	18		排泄	5
	概念理解	26		散歩	29
	文法	8		田畑	5
	長期記憶	13		保育園	16
遊び	おもちゃ遊び	54	行為や出来事の背景や対象	温泉	10
	もの遊び	23		公共	17
	身体遊び	20		筆者	40
	環境遊び	27		妻	3
	一人遊び	74		両親	19
	社会的遊び	53		親戚・知人(大人)	8
	歌	20		他人(大人)	6
	踊り	6		子ども	5
	模倣	27		動物	17
	指示	18	ものの	食べ物	36
その他の対人行為	追従	12		道具	43
	愛情表現	8		絵本	11
	非言語コミュニケーション	10		動画	4
	人間関係の構築	6		おもちゃ	4
	手伝い	8		電車	32
	利他行為	8		植物	5
	いたずら	10		環境	9
	自立	69		音	14
	見立て	16		温度	3
その他の行為	創造	11	トラ	体調	21
	片付け	6	ブル	事故	5
	空間認知	9	考察	研究的考察	94
	身体能力	26		子育て的考察	33
感情	ポジティブ	83			
	ネガティブ	24			
	嫌がらない	6			
	無関心	2			

は、多数の経路の「束」によりモデル化される。

3.4. 得られた仮説

一人称研究は単一のケースから一般化の可能性のある仮説を生み出すことに特長があるが、本研究でも長男の経験に関する多数の仮説が得られている。

- 言語は世界をカテゴリーに分節するが、カテゴリー化の能力そのものは、言語に先立って獲得される。
- 模倣と自立的行為は連続的であり、自立とは時間を空けた模倣であるとも捉えられる。
- ただし模倣が全ての起点となるわけではなく、環境のアフォーダンスが自立的行為を促すことがある。
- 語彙の獲得、見立てといった概念操作、自発的行為などは、好きなものごとから始まる。

本研究は発達心理学的な知見を得ることは目的としておらず、筆者自身も専門外である。しかし、経験の総体を経路として記述することで新たに見えてくるものがあれば、それは二人称研究の一つの意義になる。

3.5. 経験の記録方法の検証

記録をしていると、「そういえば1ヶ月前ぐらいから」と遡って日付を記すことも多い。1ヶ月前には些細な出来事だと考え気に留めなかったことが、いつの間にか繰り返され、習慣として確立されているのである。一度記録した筆者の考察が、その後の観察を通じて変わることもある。歴史哲学者のダント（1989, pp.174-219）は、現在起こっている出来事は解釈が不確定であり、叙述が困難であると言う。本研究での記録は筆者自身が、長男との継続的なかわりあいの中で解釈を深め、変えてゆく動的なものとして捉える必要がある。

また記録を見返すと、かつて長男に生じた習慣や口癖などがなくなっていると気がつくことも多い。新しい出来事や確立されつつある傾向には注意が向くが、現象がなくなったり頻度が減ったりすることには気づきにくく、記録にも残らない。筆者が行なった街歩き研究においても同じ傾向があった（北, 2023, pp.123-124）。定期的にデータを見直し、各出来事の継続状況を確認することで、より正確に経験を記述できるだろう。

筆者らはこれまで、都市や集落の履歴を対象として、メッシュワークとしてのプロセスの記述方法を探究してきた（北・伊藤・福田他, 2023）。今後はその知見も活かしながら、検討を重ねていきたい。

4. Kuya Stroll

4.1. 街歩き経験の記録ツール「WalkieLogger」の開発

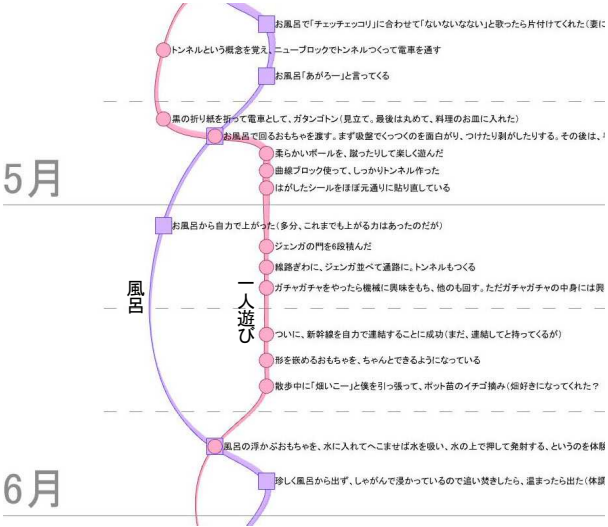


図2 長男の経験の経路の可視化事例（部分）

試みる。そのために、3DモデリングソフトRhinocerosと、ビジュアルプログラミングによりデータ処理を自動化できるアドオンGrasshopperを用いて、データを可視化するシステムを構築した。データを読み込むと、縦軸方向の時系列に沿って出来事が表示される。全データの表示やタグによる絞り込み表示などを実装しており、たとえば図2は、多数の経路の交わりによって経験の複雑性が記述できるというアイディアに基づき、2つのタグの関係性を可視化した表示方法である。経験の総体

街歩きの経験の総合的解明のため、時間、空間、発話、行動などの多様なデータを、互いに連動させた上で取得できる記録ツール「WalkieLogger」を開発している。

街を歩く際に、ウェアラブルカメラ（「GoPro HERO13」を推奨）で撮影し、映像、音声、および位置情報を取得する。カメラは頭にマウントすれば、回頭行動や視対象を捕捉できる。本研究の場合は筆者が手持ちで長男の後ろから追跡し、行動や表情も含めて撮影する。また筆者の頭に浮かんだ仮説や疑問も、録音している。

得られたデータを、PCソフト「WalkieLogger」に読み込むと、映像、歩いたルートを示す地図、発話内容のテキストが表示される（図3）。発話については、Web APIを利用して自動で文字起こしがなされる。映像と位置情報、発話データは互いが連動し、どれか1つを動かすと、他の2者もそれに対応して動く。また発話データは編集可能で、文字起こし結果の修正や簡単な分析を、映像や地図を確認しながら行なうことができる。

なおWalkieLoggerは移動体験を記録する汎用的なツールであり、街歩きにおける空間認知や経路探索行動の他、自転車や車での移動の分析などにも有効となる。まだプロトタイプ段階であるので、実際のデータによる検証を重ねることで、ツールの改良も進めたい。

4.2. データ取得の状況

データの取得は2025年3月に開始し、同年6月末までに、筆者の自宅周辺や旅行先の台湾などで、35回分のデータを取得してきた（1日に複数回のケースもある）。

4.3. 分析の構想

WalkieLoggerの開発を優先しており、分析は進んでいないが、その方法の構想を記す。まず発話テキストの表を編集して、長男と筆者それぞれの「発話」「行動」、それに長男の「注視対象」を入力し、言動を時系列にデータベース化すれば、タグ付けや、多数のファイル間の比較などが可能になる。また空間的経路の上に布置された発話や行動であることを鑑み、歩行経路やそこに見えるものといった空間の分析も進めるべきだろう。さ

らに二人称研究という文脈から見ると、長男と筆者の互いの情動の質的な分析にも踏み込みたい。情動があらわれる表情や視線、身体の動きなどを読み取れるデータが、Kuya Diaryとは違って揃っている。

これらの方法によって、何が明らかになるだろうか。筆者の感覚にすぎないが、これまでの自宅周辺での街歩きで観察されたいくつかの傾向を挙げておく。

- よく通るルートがいくつかできつつあり、それに沿って空間の組織化や、記憶の蓄積が行なわれている。
- 縞模様の棒、窓の「×」形の目張りなど、踏切を連想させる多様な物体を指さし「カンカンカン」と言う。
- 道路の端を歩くべきこと、他人の敷地に入らないことなどの社会慣習は、親から言われる言語として理解はしているが、行動としては従わない。
- 道行く人に対しては積極的に話しかけ、それによって筆者自身とその相手との会話も生まれる。

特に踏切の事例などは、日常生活での長期的なフレームの形成が、街歩き時の空間認知や探索行動と結びついていることを思わせる。道路と私有地などの社会慣習の身体化、認知地図の形成やその言語化などが今後どのように進むのか、観察を続けたい。

謝 辞

本研究は、JSPS科研費24K21176の助成を受けたものです。記して感謝いたします。

文献

- ダント,A.C. 河本英夫（訳）（1989）. 物語としての歴史—歴史の分析哲学 国文社
- 原広司（1994）. 様相と経路 スペースデザイン, vol. 352 (pp. 49-64) 鹿島出版会
- インゴルド,T. 工藤晋（訳）（2014）. ラインズ：線の文化史 左右社
- 北雄介（2023）. 街歩きと都市の様相—空間体験の全体性を読み解く 京都大学学術出版会
- 北雄介・伊藤洋志・福田真澄・早川貴光・櫻井康平（2023）. 変わり続ける社会-空間系の記述方法の探索 —タイ北部・ユースック村を事例として— Designシンポジウム2023講演論文集, 126-133
- レディ,V. 佐伯胖（訳）（2015）. 驚くべき乳幼児の心の世界—「二人称的アプローチ」から見えてくること— ミネルヴァ書房
- 諏訪正樹（2015）. 一人称研究だからこそ見出せる知の本質 人工知能学会（監修）諏訪正樹・堀浩一（編著）一人称研究のすすめ：知能研究の新しい潮流 (pp.3-44) 近代科学社

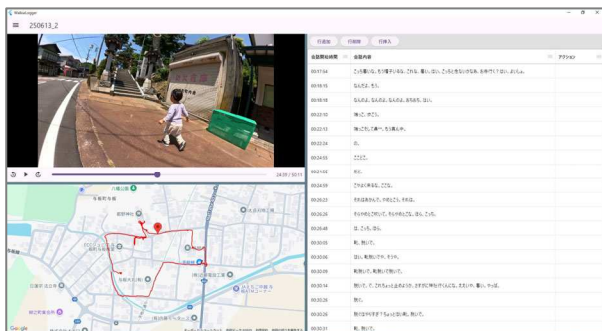


図3 「WalkieLogger」のUI